

## 78億個の普通を訪ねる旅／島宗昂生さん（17歳）

花冷えの東京を眠い目をこすりながら家族と夜便で出発し、目を覚ましたころには気温37度を超える広大な大陸、オーストラリアだった。滞在中、高校生の兄が現地の人と英語で会話するのを目にし、まだ小学生だった私は「英語が話せたら僕も混じれたのかな」と少し思ったが、そんなことはどうでもよく、色彩豊かな珊瑚礁のグレートバリアリーフ、炎を使用した圧巻のアボリジニのパフォーマンス、クロコダイルやカンガルーなど大自然の迫力を大いに楽しんだ。いわゆるレジャーだ。すでに欧州やオセアニア地域など10カ国を旅していたが、私にとつての海外旅行とはそういうものだった。文化や生活の違いなど特別に意識を向けたことはなかった。

中学に入り、英語がある程度習得したので、家族4人の旅行の機会は減り、兄ともしくは友人とで海外に行くことが増えてきた。まず初めに訪れたのはフロリダ、パームビーチだ。空港から宿泊先の伯母の家までの道中、何台も高級車が並ぶガレージに、プール付きの豪邸ばかりであった。まさに近代の物質主義社会の象徴で

あり、富の具現化であった。アメリカ人の伯父・伯母から資本主義の絶頂であるアメリカ力を聞いた。

その翌年、私は友人とセブ島にいた。マクタン空港に到着すると、やはり、空港お馴染みの高い天井、近代的な建築、そして、そこそな値段がするお土産品。何もかもが見慣れたものであふれかえていた。前年利用したアメリカ、パームビーチ国際空港や日本最大の発着便数を誇る羽田空港とも大差はなかった。バスで市街地に入ると野良犬や少し砂っぽい道路のわきに並ぶトタン屋根の家々。日本との大きな差異から若干の違和感こそあったものの、お国柄なのだろうと気にも留めなかった。

語学留学も兼ねての観光だったので、現地の人と話す機会が多く持てた。その中の一人の男性が「君たち日本人にはわからないだろうけどセブはいい方だよ。ほかの地域はもっと経済的に厳しいんだ」と静かに呟いた。バスの車窓から市街地をみた時の違和感は、単なる「文化の違い」とだけでは片づけられない別の問題があったのだと気付かされた。雲一つなく澄み切った空、南国らしい心地よい風、綺麗で派手な花々。全てが完璧なはずだった。だがその瞬間から、何も考えずに「レジャー」としてのみ旅してきた自分への罪悪感か、あるいは世界にはびこる「経済格差」が強烈に私の中で表面化してきたからだろうか、全てが皮肉なものにみえてきてしまった。そしてそれが、私の格差への意識が生まれたきっかけだった。

高校に入ると新型コロナウイルスのパンデミックのため、海外渡航はできなくなりました。そこで私はオンラインで何か代わりにできないかと考えた。そして考えたのはオンラインサマープログラムでREGJCSを友人たちと立ち上げることだった。REGJCSでは英国の大学講師に自分たちで直接依頼し、集めた20名ほどの高校生に経済・経営学の講義を行ってもらった。その講座費から発生した利益を難民の教育支援団体Takuma Projectに直接寄付した。この団体は難民キャンプでオンラインや講師を派遣した対面方式でキャンプ内の子供たちには教育を提供しており、私は教育でつながる持続的支援体制の初歩的な構図ができればと思い、選んだ。寄付をしたという行為のみであたかも「自分は社会問題に全力を尽くした」と考えるのはあまりに身勝手だと思っていたので、自分で寄付先の団体の活動、影響力を調べ、自分で精査した団体であったし、どのように寄付が活用されたのかということも見届けることで自分なりには満足していた。しかし、このプログラムを終了して寄付を行った後になんとなく腑に落ちないことがあった。それは自分の寄付は本当に難民本人達が求めているものなのかということだ。私の寄付は本当に効果的に正しいところに投じられたのだろうか。

自分が行ったことが実は身勝手な偽善だったのではないかと思うと強烈な不安感に襲われた。本当のことを探るため、私は寄付先の団体の代表に問い合わせ、現地の難民の人と実際にオンラインで交流して質問することにした。心のどこかでは自分の行為を正当化しなかったのかも知れない。彼の名前はフランコ。アフリカ訛りの入った英語で気さくに会話をしてくれた20歳の彼は、数年前にケニアカクマ難民キャンプに避難をし、現在はキャンプ内の子供たち相手に先生をしている。画面がつながり、私たちは他愛もない話から始めた。まるで自分のクラスメイトと話しているかのような気分になった。正直に言つと驚いた。インターネットやメディア情報から形成された私の難民に対するイメージとはかけ離れていたのだ。それまで難民といえば紛争の恐怖と生活への苦悩から絶望の中にいるようなイメージがあった。しかしそれらのイメージはただの偏見であり、彼は難民であることを忘れさせるほど、私たち日本人と「同じ」だった。本題に移り、難民キャンプでの状況を詳細に聞いていくと、やはり自分が持っていたイメージと少し違っていた。

そんな彼との有意義な時間の中から2つ、印象に強く残ったものがある。一つ目は難民キャンプでの犯罪状況についてだ。難民キャンプでの治安の不安定さというのは事前に把握こそしていたものの、統計上には表れない申告外の犯罪ケースも少なからずあるだろうと思ひ、聞いてみたのだ。混乱した中で犯罪というのだから強盗、誘拐などが横行しているのではと思っていたが、彼の答えは奨学金詐欺だった。彼らは常に自分のキャリアを建てようと機会を求めており、メールなどで前金をだまし取る奨学金詐欺の被害にあってしまうそうだ。二つ目は、実際のところどんな形の支援が欲しいかということに関してだ。難民の人々が今一番求めているものは何だろうか。衣類・医療品だろうか。それとも安全な水道設備や食料だろうか。彼

の答えは「チャンス」であった。彼自身エンジニアになるという夢があり、実現の機会が欲しいと語った。

私は難民問題に関して様々な勉強をしてきたつもりだった。CIEOなど国際機関の記事はもちろんのこと、ロンドン大学などが提供しているオンライン講座を受講し日本にいながら出来るだけ理解を深めようとしていた。しかし、私の理解と実際の状況には大きな「ズレ」があった。これは私一人の問題でないように思える。多くの人は難民が手取り足取り何もかも助けなければならぬ「可哀想な人」だと思っていないだろうか。実際の彼らは常にチャンスを探す野心的で勤勉で可能性あふれているにもかかわらずだ。

一つ一つの「ズレ」は小さいかもしれないがそれが重なる大きな「ズレ」となる。そしてその「ズレ」があらゆる支援の効果を慢性的に弱めてしまう隠れた要因なのではないか。では、そのような「ズレ」はどのようにして最小化できるのか。それは一次情報に触れることだ。現代はインターネット上に多くの情報が混在する情報過多社会だ。それらの情報は様々なこと的基础知識を知る上で非常に有用だと思う。しかしそれらは結局のところ二次情報だ。どんなに間違った印象を与えないように努力をしても受け手が持つイメージは必ず実態とは異なる。だからこそ私が実際にオンラインで難民と話し、自分の認識のズレに気付いたような一次情報に触れる機会こそが重要なのだ。そして今は難しいが、実際に現地に行って獲得した一次情報こそ本当の価値があるのだ。オンラインで音声や映像はつながることが

できる。しかし、話している相手とその背景の壁しか見ることはできない。まさに最近言われるように、気取っているスーツの下はパジャマのスボンかもしれない。私は勝手にフランコのいるケニアを灼熱の地という想像をしているが、ケニアにはマイナスに到達するような高山地帯も存在する。実際に肌で感じ、眼で見、耳で聴き、そして現地の人々と交流する。この地道で一見効率の悪そうな原始的な方法こそが物事を「学ぶ」ということなのだと思う。ノーベル平和賞を受賞したグラミン銀行創立者ムハンマドユヌスは自伝で「あなたの組織が『橋を作る目的は世界から貧困を撲滅するためだ』というなら、貧困のはびこる場所に本部を移すべきだと思うのです。ダツカに来れば、浮浪者や最も貧しい人々に取り囲まれることになります。問題のある場所のすぐ近くに住むことであるあなたの組織はもっと早く、もっと現実的なやり方で、この問題を解決することができると思うんですよ」と語った。

思えば例外なくこの世界に存在する諸問題はこの認識の「ズレ」に起因するといっても過言ではないだろう。日本が諸外国と70年も前の問題をいまだに解決できていない理由は何故か。それはお互いの戦争、そしてひいては相手に対する認識がずれているからだ。人は相手にすべての落ち度があると妄信し、その思考に固執してしまう。しかし、それは相手側も同じように抱えているのだ。お互いに相手への認識がずればずれるほど自分の考えを変えることは難しくなり、遂には自明性として確立され、その檻の中に閉じ込められてしまう。その見せかけの自明性の檻を唯一打破できるのが旅だ。自分が固めてきた環境世界を離れ、他者の環境世界に入

ることで自分の信じていた普遍性は公然と破壊される。そしてこのプロセスを続けることが、多くの対立や認識不足によって生じる社会の諸問題を解決し、平和な世界への一助となるのではないか。私は、これからも旅のなかで「他者の普通」を感じながら、自分の視野を広げていくとともに、世の中にオンラインであれ、実際の旅であれ、一次情報に触れるという機会を多くの人に広めたいと思う。

—君たち日本人にはわからないだろうけど—

この言葉を聞くことこそが「旅」なのだ。

参考文献(引用、一部改変)

「ムハンマドユヌス自伝上」

ムハンマドユヌス、アランジヨリ著 猪熊弘子訳 早川書房